

マタイによる福音書17章20-21節 「からし種のほどの信仰」

## 1A 信仰とは

1B 神への信頼

2B 神からの賜物

## 2A 信仰の薄い者たち

1B 山の麓にいた弟子たち

2B 悪霊の仕業を見ていた弟子たち

## 3A 小さな信仰で成せる偉業

1B 神への信仰

2B 弟子への約束

3B 信仰の英雄

## 4A 祈りと信仰

### 本文

マタイによる福音書 17 章を開いてください、私たちは午後に 17 章を一節ずつ学びますが、今朝は 20 節、そして 21 節に注目したいと思います。「20 イエスは言われた。「あなたがたの信仰が薄いからです。まことに、あなたがたに言います。もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません。」そして新改訳には 21 節がありませんね、下の引照部分をご覧ください、「21 ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行きません。」弟子たちが、悪霊につかれて、癲癩(てんかん)を患っている子から、悪霊を追い出せずにいたところ、イエス様が追い出されました。そして、弟子たちがなぜ自分たちが追い出せなかったのかを尋ねて、イエス様が答えられた部分です。

## 1A 信仰とは

### 1B 神への信頼

信仰が薄いとイエス様が言われて、それから、「からし種ほどの信仰」がありさえすれば、山をも動かすことができるというのはすごいです。からし種と言えば、その種があまりにも小さいので有名です。縫い物をする時の針の先のように小さいものです。そして、それが灌木のように生え、3-4 年に生長すると言われます。つまり、信仰が薄いというのは、からし種のような小さな信仰さえなかったということです。



つまり、信仰は自分の心が信心深くなっているかということではないことが、ここから分かります。

天地を造られた神に信頼しているかどうか、神ご自身の能力が中心であることが分かります。大事なのは、自分がどれだけ信じているか？ということではなく、何でもおできになる神と波長が合っているかどうか？であります。

ある人が信仰をこのように定義しました。「神に抛り頼み、従う姿勢をもって、その御声を聞く。」本質的に、信仰は聞くことなのですが、ただ聞くのではなく、自分が頼りにしている人の言うことを聞いている、そして真面目にその言っていることに従うつもりで聞く、ということです。山で道に迷って、途中で地元のおじいさんに会って、おじいさんの言うとおりに山を下るということを想像してください。おじいさんに頼って、彼の言うとおりに歩いて行き、それで麓に降りて行くことができます。聖書には、信仰についてこう言っています。「信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 11:1)」おじいさんの例で話すならば、山から降りたいという、望んでいることが必ずそうなると安心しています。そして麓に降りて行った後のことも確信しています。そういう、全き信頼によってもたらされる保証と確信があるのです。

あるクリスチャーの学生と無神論者の大学教授の対話を見たことがあります。本当のことかどうか分かりませんが、見てもない神をどうして信じられるのか？と教授は、いかに非科学的なのかあざ笑っているのですが、学生は「どなたか、教授の脳を見たことがある人がいますか？」と尋ねました。当然、誰もいませんが、「では、見たことしか信じられないのであれば、教授に脳みそがあることも信じられないことになりますね。」と言いました。このように、あまりにも当たり前のように、私たちは信仰を持っています。「私は何も信じていません。」と言っている人も、実は信じながら生きています。目に見えないものを見るようにして信頼し、また期待しているから人は生きられます。神はいないと言っている人も、事実、何かを絶えず、瞬時、瞬時、信じながら生きています。

私が新しく信じたばかりの時に、大学で、先輩のクリスチャーが行ってくれたことがとても印象に残っていて、自分の後の信仰の理解になりました。消しゴムを机の上に落とす時に、「これが、落ちろ、落ちろ、と念じることが信仰ではない。『落ちるでしょ』と確信をもって、安心して言うこと、これが信仰だ。」ということです。イエス様が祈りなさいと言われた、主の祈りの手前でも、異邦人のように、「同じことばをただ繰り返してはいけません。彼らは、ことば数が多いことで聞かれていると思っているのです。(6:7)」と言われましたが、その違いです。信頼して安心し、確信をもって祈るとき、それが信じて祈るということになります。

私たちが、このようにして神の慈しみを信じて、どんなことがあっても主が、すべてのことを働かせて善にしてくださることを信じます。すべては神の御手にあり、「私たちが願うところ、思うところのすべてをはるかに超えて行うことのできる」ことを信じて祈ります(エペソ 3:20)。神が良い方で、また信じる者に全能の力を働かせてくださることを信じることです。そこに、恐れ、不安、いらだちはありません。「詩篇 37:7 【主】の前に静まり耐え忍んで主を待て。その道が栄えている者や悪

意を遂げようとする者に腹を立てるな。」神への人格的な信頼があれば、これらの不安や妬み、いら立ち、恐れは消え去ります。

## 2B 神からの賜物

そして、もう一つ、信仰には賜物という側面があります。自分が内側から振り絞って信じるという、私たちの能力ではなく、神が信じることさえも、信じるようにしてくださる賜物をくださいます。「むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。(ローマ 12:3)」神が分け与えてくださる、信仰の量りです。ですから、私はしばしばみなさんに分かち合いますが、自分が意識していることよりも、既に行っていて意識していないことの方に、自分の信仰が生かされている場合が多いです。言われるまでもなく行っていることに、信仰によって動いていて、行っていることが多いのです。「ルカ 17:9-10 しもべが命じられたことをしたからといって、主人はそのしもべに感謝するでしょうか。同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」なるべきことをしただけ、という思いのところには、神の恵みが働いています。自分がしているという意識が少ないです。信仰の量りにしたがって、与えられた能力なのです。

このように、あまりにも自然に与えられているものであり、信仰さえあれば、いろいろなことをすることができます。例えば、結婚している夫婦が、一つのことを成し遂げる時に、そこに信頼関係があれば、大きなことを成し遂げることができます。けれども、そこまでの信頼がなければ、何一つ行うことができませんね。どんな小さなことも前に進みません。一方が何をしても、他方が何かたくらんでいるのかもしれないと思ってみたり、相手の言っていることを誤解してみたり、ほんの些細な事でも前進することができないのです。同じように、神との信頼関係があれば、とてつもない大きなことができます。神の協力者として、人にはできないことも何でもできます。けれども、神への信頼がなければ、キリスト者の生活として、何をやっても空回りです。心が主につながっていないので、ちょうど穴の開いた袋に水を入れるようなもので、いつまでもたまらないのです。

## 2A 信仰の薄い者たち

### 1B 山の麓にいた弟子たち

山の麓にいて、イエス様と弟子三人を待っていた他の七人の弟子たちが、その不信仰に陥っていました。高い山にて、イエス様の姿が変貌し、父なる神の御声を三人は聞きました。それから山に降りて行くのですが、残された弟子たちは、「イエスはおられない」という思いに満たされたに違いありません。イエス様のご臨在されているということ、私たちが忘れると、不信仰の思いに満たされてしまうのです。けれども、思い出してみてください。イエス様は、「十二弟子を呼んで、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出して、あらゆる病気、あらゆるわずらいを癒すためであった。(10:1)」とありました。イエス様は物理的におらずとも、その授けられた権威を行使することができたのです。「ここには、イエスがおられるのかどうか？」という思いは、主を試す

ことになります。そして不信仰の思いに満たされてしまい、からし種ほどの信仰も残されなくなってしまうのです。

## 2B 悪霊の仕業を見ていた弟子たち

そしてもう一つは、「悪を見つめすぎてしまった」ということが言えるでしょう。悪霊が、一人の子の中で暴れ狂っている姿を見続けてしまいました。その悪の力を目の当たりにしました。そこで、心の中でイエス様への信仰がいつの間にか削がれてしまいました。神の力ではなく、悪魔の力のほうに注目してしまいました。これは不信仰です。「あなたがたのうちにおられる方は、この世にいる者よりも偉大だからです。(1ヨハネ 4:4)」悪の力は、いつの間にか私たちをそこに見つめるように仕向け、偉大な神の力を見るのが内容に仕向けます。

なので、悪にはうとくあってほしいとパウロは言いました。「…なお私が願うのは、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあることです。平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます。(ローマ 16:20)」主は、私たちに付いていてくださっています。そしてサタンを踏み砕くほどの権威と力まで与えておられます。それだけ愛されているのです。フィラデルフィアにある教会にもイエス様は、「見よ。彼らをあなたの足もとにひれ伏させ、わたしがあなたがたを愛していることを知らせる。(黙示 3:9)」と言われました。その大きな権威の現れは、神に愛されていることの印です。

## 3A 小さな信仰で成せる偉業

### 1B 神への信仰

そこで改めて、20 節を読みます。「もし、からし種ほどの信仰があるなら、この山に『ここからあそこに移れ』と言えば移ります。あなたがたにできないことは何もありません。」イエス様は、弟子たちを愛しておられます。ですから、弟子たちがご自身にほんの少しの信頼さえ寄せれば、ご自身の力を表してくださるのです。ここでの「山」は、物理的な山のことを指しているし、また権威や力の象徴としても話しています。黙示録には、山がかつてあったところから移される神の裁きが書かれています(6:14)。神は山を移すことのできる方です。けれども、権威や力を象徴しているでしょう。「ゼカ 4:6-7 これは、ゼルバベルへの【主】のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって』と万軍の【主】は言われる。大いなる山よ、おまえは何者か。おまえはゼルバベルの前で平らにされる。彼がかしら石を運び出せば、『恵みあれ。これに恵みあれ』と叫び声があがる。」神殿を再建していたゼルバベルには、周囲の有力者からの激しい阻止行動や政治工作を受けていたし、瓦礫が積み上がっていて建設があまりにも途方もない作業のように思われましたが、それを「大いなる山」と主は表現しておられます。この弟子たちの場合は、この子を癲癩で痛めつけていた、サタンの力のことであったでしょう。

問題は繰り返しますが、私たちの信じる能力のことではありません。神の心と波長があっている

のかどうか？であります。神と心を一つにしているのであれば、その信じる者に神は全能の力を働かせるのです。「Ⅱ歴代 16:9【主】はその御目をもって全地を隅々まで見渡し、その心のご自分と全く一つになっている人々に御力を現してくださるのです。」

## 2B 弟子への約束

そして、これは自分が何かを告白したら、それがその通りになるというような、積極的告白の教えではありません。キリスト教会内にある偽りの教えで、「積極的に告白すれば、その言ったことがその通りになる」という教えがあります。ここでイエス様が言われているのは、正反対です。自分の願っていることではなく、むしろ神の願われていることを敢えて選び取る、自分を捨てて、自分の十字架を負って、それでイエスに従う弟子だからこそ、その御力が現れます。ちょうど、この出来事が起こる前に、彼らはピリポ・カイサリアにいました。そこでイエス様が、そのことを話されたのです。積極的告白とは裏腹に、自分の可能性や潜在性に対しては、全く無しとしなければ、信仰が与えられません。からし種のほどの信仰なのですから、自分の信じる力などこれぼつちもないというようなところで、神に拠り頼む時に、神がその全能の力を表してくださいます。

## 3B 信仰の英雄

それで、神を信じることで、どのように神の力が現れたかを、数多くの信仰の証しをヘブル書 11章で読むことができます。「11:33 彼らは信仰によって、国々を征服し、正しいことを行い、約束のものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、34 火の勢いを消し、剣の刃を逃れ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を敗走させました。35a 女たちは、死んだ身内の者たちをよみがえらせていただきました。」これは、すごい英雄伝です。

では続きを読みます。「35b また、ほかの人たちは、もっとすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを拒んで拷問を受けました。36 また、ほかの人たちは嘲られ、むちで打たれ、さらに鎖につながれて牢に入れられる経験をし、37 また、石で打たれ、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、困窮し、圧迫され、虐待されました。」とてつもない迫害です。けれども、彼らにも信仰がありました。それは、第一に、自分が死んでから神の報いがあることを信じることのできた信仰です。第二に、その苦しみに遭っている時も、なおのこと耐え忍ぶことのできる信仰です。なぜなら、十字架の苦しみを受けられたイエス様の御霊が、その一人一人に留まってくださるからです。信仰によって生きる時に、苦しみを受けなくて済むという約束では、必ずしもありません。けれども、苦しみの中にあっても、それでも希望を捨てないでいられる、その信仰はいつでも真実です。

## 4A 祈りと信仰

そして最後に、21 節「**ただし、この種のものは、祈りと断食によらなければ出て行きません。**」とありました。自分には全く、相手を救う力がありません。今、目の前で癲癩で苦しんでいる子に対

して全くの無力です。そこで必要なのが祈りです。祈りというのは、神を信じて、神に拠り頼む行為そのものです。自分には何もできないことを、告白する行為そのものです。とてもへりくだらされません。自分には何もないことを告白することは、プライドを捨てることに他なりません。断食をするのは、その祈りに集中すること。ただ、思い立った時に祈るようなものではなく、じっくりと祈りに時間を捧げることを意味します。このことこそが、イエスがおられるのかどうか分からないと感じるような試練の時、悪の力が強く働いていて、どうすることもできないと感じる時に必要なことです。

イエス様は、「ルカ 18:1 いつでも祈るべきで、失望してはいけない」ことを教えられました。やもめの喩えを語られています。無慈悲な裁判官であっても、裁いてくださることを訴えているやもめがうるさくてしかたがないから裁判をしてあげることになりました。不正な裁判官でさえそうなのだから、ましてや正しい神が、「18:7-8 昼も夜も神に叫び求めている、選ばれた者たちのためにさばきを行わないで、いつまでも放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は彼らのため、速やかにさばきを行ってください。だが、人の子が来るとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」しつこく祈るのをやめるということは、その時点で神ではなく、自分自身の悟りに頼るということを意味します。

祈ってください。これまで祈っていなかった人は、悔い改めて祈ってください。神が何を悔い改めを求めているか？と言えば、不信仰、つまり祈りがないということです。そして、祈りを止めてしまった方は、悔い改めて主にまた祈ってください。主は祈りを通して、ご自分の心を私たちの中に入れてくださいます。そして、私たちが僅かに思ったこと、からし種のような信仰が与えられて、それを通して神は大きな業を行われます。神と調和を合わせるのは、自分には何もなくて、ただ神に拠り頼む、祈るということによってです。